

当館では平成二十四年度(二〇二二年)に、瑛九(本名・杉田秀夫、一九二一—一九六〇)に関する作品と資料を多数収蔵した。これらは、生前の瑛九と親しく交流し、その没後に四七八ページにおよぶ詳細な評伝『瑛九』(青龍洞、一九七六年六月)を著した画家、山田光春(一九二二—一九八二)の旧蔵品である。山田は愛知県に生まれ、一九三四年に東京美術学校師範科を卒業後、中学教師として宮崎に赴任し、瑛九と名乗る前の杉田秀夫と知り合うことになる。その後、山田は一九三六年五月には愛知県刈谷市に転任するが、以降も頻繁に手紙のやりとりを続けている。山田は一九三七年に第一回自由美術家協会展に出品して協会賞を受賞し会友となり、一九四〇年に会員、戦後は一九六四年に主体美術協会会員となり、また愛知を拠点に美術教育にも貢献した。

立美術館および愛知県美術館に寄贈されているが、その後も遺族の元に残されているものを、ほぼ一括して当館で収蔵することになったのである。作品・資料は多岐にわたり、現在も整理作業中であるが、近いうちにまとめて公開すべく、作業を進めているところである。ここでは、その主要なものをつか紹介し、公開に向けての経過報告としたい。

いわゆる作品としては、フォト・デッサンとして『眠りの理由』十点組一セットおよびその他十二点、フォト・カラージュ十点、ペンによるデッサン四十二点、油彩三点などがある。このうち数点が、山田による評伝『瑛九』に図版として紹介されているものの、大部分はこれまで展覧会に出品されたことのない、いわば幻の作品であり、きわめて貴重である(油彩の『嗚海風景B』(一九三九年)、《園にて》(一九四三年)の二点のみ、二〇一一年に宮崎県立美術館、埼玉県立近代美術館、うらわ美術館で開催された「生誕一〇〇年記念 瑛九展」に出品された)。

フォト・デッサン

収蔵した一群の作品・資料のうち、第一

に挙げるべきはフォト・デッサン集『眠りの理由』であろう。フォト・デッサンは、モイロナジのフォトグラム、マン・レイのレイヨグラムと同じ原理で、レンズを用いず、印画紙の上に直接物体を置いて感光させ、その影を画像として定着させるものであるが、瑛九は針金や網のような物体の他に、自らデッサンを紙に描いてそれを切り抜き、型紙として自由に組み合わせ、浮遊感に満ちた独自のイメージを生み出した。彼はそれらを携えて一九三六年二月に宮崎から上京、美術評論家の外山卯三郎に見せて認められ、「フォト・デッサン」という技法もそこで命名されて、雑誌『みづる』三月号に初めて「瑛九」の名で五点の作品を掲載した。それに続いて、同年四月にこの『眠りの理由』を、外山の主宰していた芸術学研究会から限定四十部の作品集として刊行したのであった。

「Raison du sommeil」というタイトルを、曲げた針金であしらったフォト・デッサンを表紙とした帙に、十枚のフォト・デッサンと外山による解説が収められている。限定四十部とはいえ、揃いで所蔵しているのは横浜美術館などごくわずかで、多くはいずれかを欠いた状態となっており、こ

の山田旧蔵品はやや状態が悪いものの、完全揃いとして貴重なものである。なお、外山による解説の記された二つ折り四ページのリーフレットの一ページ目には通例、限定番号が付されているが、これは無番である。限定四十部の他に、アーティスト・プルーフとして作家の手元にあった番号外のセットを、山田が譲り受けたものと考えられる。

さらに興味深いのは、この『眠りの理由』の十点の他にさらに二点、同一イメージだが印画紙の種類とサイズを若干変えたものが、山田旧蔵品に含まれていることである。フォト・デッサンというのは、印画紙の上に直接物体を置いて感光させるという技法の特性上、ネガが存在しないため同一イメージの作品を何枚も作ることはできない。『眠りの理由』の四十部のプリントは、瑛九が作ったオリジナルのフォト・デッサンを写真家の猪野喜三郎が複写したものである。その際、どうやら何種類かの印画紙でテストプリントがなされたらしく、当館にもすでに二点が収蔵されている。今回の山田旧蔵品の二点も、おそらく同様のテストプリントであろう。刊行された『眠りの理由』の各印画紙は、多少の誤

差はあるものの約二七×二二センチなのだが、テストプリントは縦横ともひとまわり大きいのだ。その分だけ、イメージも周辺部分がわずかに広範囲に写っている。これは『眠りの理由』制作の過程を研究する上で貴重な事例と見なすことができる。

#### フォト・コラージュ

瑛九は『眠りの理由』で華々しくデビューした翌年、一九三七年に自由美術家協会の創立会員に迎えられ、その記念すべき第一回展には、フォト・デッサンではなくフォト・コラージュを出品した。その多くは、ファッション誌あるいは映画雑誌に掲載された女性のモノクロ写真などを切り刻んで接合した、暴力的かつエロティックなイメージを生み出したものとなっている。それらはいいて、黒い台紙の上に貼られるため、闇の中から得体の知れない物体が出現したような、鮮烈な印象を見る者に与える。山田旧蔵品の十

点のうちのもくもこの傾向を示すが、中には珍しくカラー写真を用いた作例もある〔図1〕。モチーフの選択や組み合わせ方など、これまで知られている作例よりもバラエティに富み、彼のこの時期の造形的探究を知る上で興味深い。

#### ペンによるデッサン

これら四十二点のペンによるデッサン

は、たわいもない落書きにしか見えなかもしれないが、しかし当時の日本で、ここまで徹底して理性の統御を離れた線を描いた画家は他に見当たらない。混沌としたイメージは、シュルレアリスムの自動筆記を思わせるが、一方で瑛九はシュルレアリスムの、無意識に溺れるような方法論には批判的であった。これらのデッサンが描かれた一九三六年——『眠りの理由』とまさしく同時期——に、瑛九が現実を、手垢にまみれた既成概念の枠の中で捉えることを厳しく拒否し、いかにして現実に直接触れることができるかを執拗に模索していたことが、残された彼の文章などから窺えるが、これらの特異なデッサンは、その探究の所産と考えられる。

#### 油彩

三点の油彩画はいずれも小品ではあるが、写実と抽象との間で揺れ動いていた瑛九の模索のあとを示すものである。《園にて》（一九四三年）は印象主義的な点描で風景と人物を描いているが、その光に包まれるような表現は、晩年の点描による抽象画に通底するものも感じられ、彼の画業の展開を考察する上で検討に値する。

#### 記録写真

山田光春は、瑛九の没後に評伝を執筆するため、全国各地の関係者取材するとともに、現存作品の記録写真を撮影してまわった。それらをまとめた「瑛九油彩作品写真集」（四八二点収録）は限定三部の私家版として製作されたが、今回収録したのは、その全ページを改めてカラー写真で複写したものである。一種のカタログ・レゾネとして、瑛九研究の基礎となる仕事である。

また、作品の記録写真のほかに、各地の取材の際に撮影されたスナップ写真も少なくないのだが、被写体の特定が今となっては難しいものも多い。ご健在の関係者への確認作業が急務である。

#### 印刷物類

山田光春による評伝『瑛九』のほか、瑛九没後に彼を慕う者たちで組織された

「瑛九の会」の機関誌『眠りの理由』（十四号まで。一九六六―七九年）などがある。それに加えて、これまで開催されてきた瑛九展の目録や案内状、瑛九について言及のある雑誌、瑛九が所持していた海外の雑誌などがある。海外の雑誌の中には、シュルレアリスムの貴重な文献である『ミノートル』第七号（一九三五年）が含まれ、これには瑛九が自らドローイングを施した表紙〔図2〕が付けられている。また『カイエ・ダール』一九三五年五・六合併号もシュルレアリスム関係の記事が多く、瀧口修造の寄稿も含まれている点に興味深い。

#### 書簡

山田旧蔵資料には、瑛九から山田宛てた、およそ百通の書簡が含まれている。一九三五年、すなわち山田が宮崎で教員をしていた時期のものから、瑛九の晩年ま



図1 瑛九《作品》1937年頃

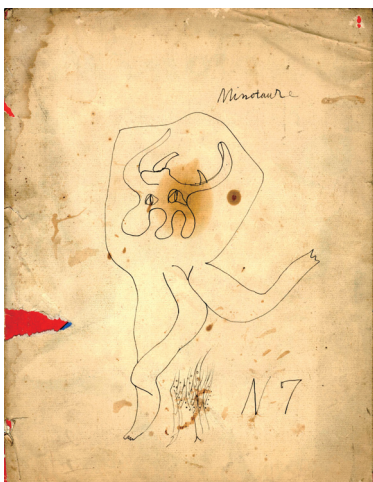


図2 『ミノートル』第7号(1935年)の瑛九による手作り表紙

でに及ぶが、その半数以上が、一九三五年から三十七年にかけての時期に集中している。模索の一九三五年、デビューの一九三六年、自由美術家協会創立会員となった一九三七年という、瑛九の生涯の中でも最も変化に富んだ時期であり、自負心と画壇への不信感がいまぜとなった、彼の揺れる心を正確に表出したきわめて濃密な文章である。

そしてまた、上述の作品や資料と、それぞれに対応する時期の書簡とを照らし合わせながら読み込んでいくと、瑛九の活動が鮮明に浮かび上がってくる。例えば一九三五年七月十二日の書簡では、瑛九が山田に「夏休にもし君がカイエダアルを持っていかなかつたら僕に借して下さい」とねだり、同年九月十二日の書簡では「カイエ・ダールは一日に十ペンはみる。すこしいたむかナ」とある。先ほど紹介した『カイエ・ダール』一九三五年五・六合併号を指すものと思われ、これももともと山田の所持品であったこと、瑛九がこれに多大な関心を示していたことがわかる。

とりわけ重要なのが『眠りの理由』刊行前後の書簡である。例えば一九三六年三月九日の書簡には、当時の活字化された文献だけでは窺い知ることのできない事項が満載されている。やや長くなるが、以下に引用したい。

予定表

三月の個展は三味堂からことわられたので中止だ。安井梅原相手の画商らしくて大よろしい。

土浦といふ日本で最も新しいけんちく家と共に新しい仕事をする。住むためのカイイとしての住宅とむすびづく我々の作品——壁写真。アサヒカメラにまとめて発表する。

映画雑誌にも仕事をさんかさせる。画集は二十日には出来上る。洋画研究はすこしおくれる。

長谷川の新時代の同人に参加して新しき運動をおこす——僕と長谷川による新しき同人展の出版——及個展 新しきキネマへの参加——予定 瀧口修造とP・C・Lにおける仕事。いまだメハナつかず。瀧口を利用することについて。

みづゑはすでに君の方が早くみたらう。大阪では吉原治良及二科の松井正に会。べんかいをさかんにしてゐたが、この二人は良心的新人といえるであらう。今が一番金がある。例の本代として十円でも二十円でも月給日がきたらたのむ。やたらに方々から話があり、あいたがつてゐる人がありおちつかぬ。街をコウモリのようにとんでゐる。個展は四月新時代の一員としてキノクニヤでやるヨテ

イ。海老原喜之助には二、三、日内にあ

ふはずになつてゐる。その他大勢。二科と独立の新人で又ぶんれつがあるかもしれない。とにかく君は今年一年展ラン会の事を考へずかけるだけかけ。その内にオレがすみよい画壇にしてやる。もつとオチついて色々カク。

僕の仕事といふとワカラズやハマン・レイと同じ仕事かと思ひやがるので不愉快だが、オレがマン・レイをケイベツしてゐる事はワカルやつにはワカつてゐる。比かく論がたたかわされてゐる。

(後略)

『眠りの理由』の刊行にともない、さまざまな企画が持ち上がったことが垣間見える。なかでも建築家の土浦亀城との「写真壁画」、瀧口修造とのP・C・Lにおける映画の仕事などが計画されていたのは興味深い。これらは実現しなかったものと思われるが、一気に脚光を浴びつつある瑛九の高揚感が伝わってくる文面である。しかし一方では、同じ書簡の中で自らの仕事にマン・レイと安易に同一視されることへの不満も吐露されている。

瑛九はこのちしばらく、こうした周囲の評価(既成の枠の中に位置づけられること)に苦しめられることになる。一九三六年七月十七日の書簡では「僕は日本画壇に失恋した うつとしい感情のなかで不眠にかかる」といい、同年十一月十七日の書簡

では「画壇といふ事を考へるとまつたく自分の行く途がふさがつてしまふ」と鬱々した心境を打ち明けている。前述のフォト・カラージュの連作は、こうした精神状態の中で制作されたのである。この揺れる心の動きの過程を、制作の展開と並行して丁寧にとどり、彼が本来やりたかったことを明らかにすることが、これら山田旧蔵瑛九作品・資料を公開する際に中心的な課題となるだろう。なるべく早い公開を実現すべく、鋭意準備中である。ご期待いただきたい。

(企画課主任研究員)

次号予告 2015年8-9月号 8月1日刊行予定

## 現代の眼 613

検証 山下菊二《あけぼの村物語》

所蔵作品展 こども+おとな芸館(仮称)

Review

生誕110年 片岡球子展

「事物」—— 1970年代の日本の写真と美術を考えるキーワード

2015年6月1日発行(隔月1日発行) 現代の眼 612号

編集: 独立行政法人国立美術館 東京国立近代美術館

制作: 光村印刷株式会社

発行: 独立行政法人国立美術館 東京国立近代美術館

〒102-8322 東京都千代田区北の丸公園3-1 電話 03(3214)2561

表紙: 東京国立近代美術館収蔵庫 撮影: 木奥恵三

東京国立近代美術館賛助会員 (MOMAT メンバース)

SEIKO セイコーホールディングス株式会社  鹿島建物  三菱商事